

小学校の教育現場で働く、教職員の皆様へ

サポート通信「つなぐ」

編集：こども発達相談センター

第9号

令和3年9月発行

連絡先 23-7534



【特集】学校訪問・サポート情報に関するアンケート結果

令和3年度は、学校訪問による子どもの観察ができました。コロナ対応のさなか、早く学校訪問の時間を割いていただき、関係小学校の校長先生をはじめ、特別支援教育コーディネーター、各担任の方々には、大変お世話になりました。また、担任の先生方には、年度当初の多忙な時期に事前調査にご協力をいただき、感謝いたします。

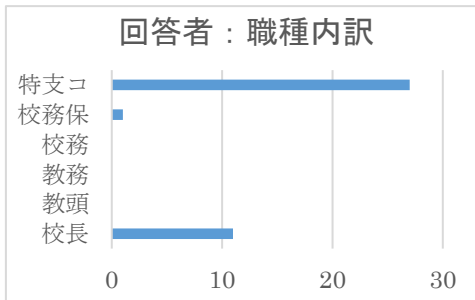
さらに、今回の特集に示すよう当センターの事業の見直しのため、事後アンケートにもご協力をいただき、あわせて感謝を申し上げます。

はじめに、「学校訪問」に関する各学校による回答結果を分析し、今後の対応方針の方向性について述べます。



●【学校訪問】について

訪問をした学校は、46校で、46校中42校に回答がありました。右グラフは、回答者の職種内訳です。

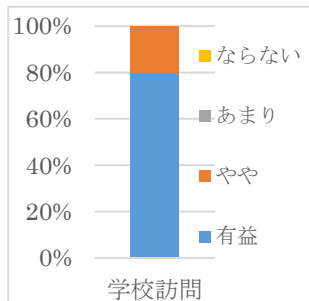


当センターは、この「学校訪問」の目的に、こども発達相談センター事業の見直しに関する資料収集を挙げています。学校現場が期待する当センターへの機能を把握することで、事業の改善を図ってまいります。

「学校訪問」について、学校として有益になるのかという項目については、次のグラフのとおりです。

80%から「有益になる」と回答をいただきました。

自由記述に「書面だけのサポート情報だけでなく、実際に教室での様子を見ての助言は大変ありがたい。今後も継続を」と訪問を受ける学校としてもメリットを感じていただける学校がありました。20%の回答に「やや参考になる」という回答があり、「学校の要請があれば実施する形の方が、学校(担任)の負担が少なくなる」と回答理由を添えていただいた学校もありました。



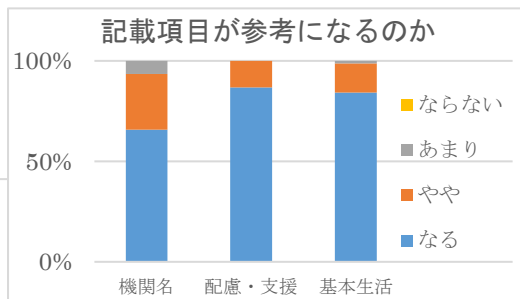
★来年度の「学校訪問」について

本年度は、対象校すべてで学校訪問を受けていただきました。来年度は、学校ごとの事情、ケースごとの事情を踏まえ、訪問の実施有無についても事前調査を行っていきたく考えています。

●担任による「サポート情報」の評価について

訪問による児童観察を実施したケースの担任182名中147名の回答がありました。2・3年生については、名称が「教育相談の記録」から「個別の支援計画(原案)」そして「サポート情報」と変わり、記載形式も変化をしていました。1年生については、「サポート情報」の名称で、同一の形式でそれぞれ各学校に渡っています。よって、1年生分である93ケース中76ケースの回答についてのみ対象にし、述べていきます。

下記グラフは、「サポート情報の内容で、どのようなことが参考になるか」の質問への回答結果になります。



「配慮・支援(案)」の記載について、86%の回答者から「参考になる」という回答をいただきました。

※機関名：就学前の医療機関名

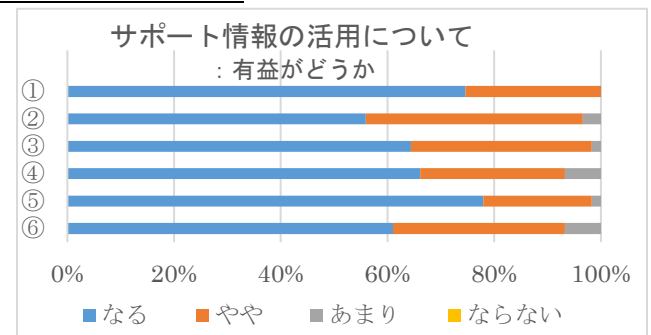
また、「基本的生活を含む子どもの状況」の記載については、83%の方から「参考になる」との回答を得ました。

●「サポート情報」に活用について

『「サポート情報」は、有益かどうか』について、1年生担任である93ケース中76ケースから回答をいただきました。下記グラフがその結果になります。

①	医療機関、教育相談センター等、関係機関と連携する際の基礎資料にする
②	スクールカウンセラーによる対象児理解の参考資料にする
③	経年後の子ども理解の基礎資料にする
④	校内における子どもの共通理解資料にする
⑤	「個別の教育支援計画」の作成等、計画立案の参考資料にする
⑥	似ている他の子への指導の参考資料にする

1年生の担任として①、「関係機関との連携の際の基礎資料」⑤「個別の計画の立案」の項目に、70%を超えて「有益である」との回答をいただきました。



●「サポート情報」の評価について：自由記述からアンケート自由記述の中からいくつかを取り上げ、今後の「サポート情報」を含む「こども発達相談センター」の方向性をご説明していきます。

- ：回答されたアンケートに記載されていたこと
- ：こども発達相談センターの方針等

【記述全般に関して】

- 今後も同じ内容で提供していただきたい。
- 必要な支援が具体的に示されるので、学校生活の場面で、是非実践したいと思った。なかなか本人から困り感を汲み取ることができないので、どんなことから困り感を感じるのか把握できた。
- 令和3年度から、別紙にあるよう「サポート情報」の書式を変更しました。個別検査の結果は、保護者了解を得て添付しています。その内容から「得意なこと・苦手なこと」を読み取ってください。
- 生い立ちや性格、家庭環境等の踏み込んだ情報が欲しい。
- 当相談センターの「就学の相談」は、保護者了解を得た「医療機関からの情報」と相談中に「保護者から提供される情報」をもとに作成をしています。



「サポート情報」は、重要な視点を押さえた情報と言えますし、園児観察をしていないことで、ある意味「偏った情報」とも言えます。

「サポート情報」を作成することで、医療機関からの情報が「切れ目のない支援」として、小学校へきちんと引き継がれるよう極力努めています。しかし、「保護者の承諾」という限界があります。ぜひ、学校からの園児観察、担任による教育現場での観察等、による支援情報を追加取得の上、じっくりと保護者との相談活動を行っていただきたいと考えます。

また、「合理的な『配慮・支援(案)』は、通常学級で個別対応がその通りに実施されるとは限りません。担任とは、記載事項の優先順位を話し合うといいでしょう。」と保護者に話してあります。

一方、就学時における子どもの発達を考慮すると、サポート情報にかかっている「合理的な配慮・支援」は、他の子ども達にも有効な支援になっている場合があります。言い換えると、ユニバーサルデザイン教育的な記述と読み替えることもできます。

【小2以上の担任からの回答について】

以下、2・3年生を担当している方の代表的な内容について取り上げます。

- 子どもの背景にある行動理由を推測できる資料である。
- 2年が経過し、できることも増えてきた。成長をうれしく思う。現在の情報があると嬉しい。
- サポート情報の「配慮・支援(案)」に記載される内容は、以下のように3つに分けることができると考えます。



- ①本人の努力のみでは、修正しにくい部分がある。
 - ：文字の形を整えるのが苦手
 - ：音に対する敏感さがある
 - ：発問と答えにずれがある 等
- ②本人のがんばり、周りの支援で、変化する。
 - そして、変化の方向は改善とそうでないことがある。
- ③一見改善の方向に進んでいるが、ストレスや違和感が本人内に深く潜行することがある。
 - ：できるようになった
 - ：感情起伏の山がなだらかになった
 - ：学校での改善がみられるが、家庭で不安定さが増えてきた
 - ：学校に行き渋ることが増えてきた 等

その上で、合理的な「配慮・支援」を検討する場合、子どもの現状を把握する必要があります。この対応は、教育現場で行うべき対応ではないかと考えます。子どもと接し、子どもに直接かかわる人の目が、一番重要です。それは、教育のプロとして専門性を発揮するところではないでしょうか。

また、前年度の記録をどのように学校内で引き継いでいくのかといった体制作りも各学校での対応になってくるかと考えます。



【サポート情報の形式変更について】

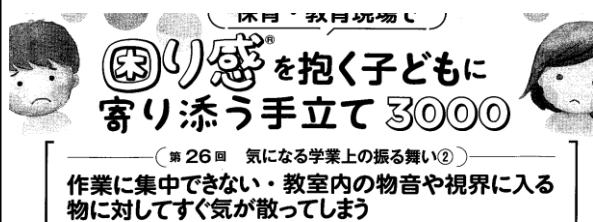
毎年の形式変更で、学校現場にご迷惑をおかけしております。担当者として、以下状況を踏まえた業務改善ですので、ご理解をいただきたく思います。

- ・「サポート情報」作成数が増加している (H30：20→R1:60→R2:90 ケースと増加)
- ・多くのケースで個別検査を実施し、検査結果が保護者の手元にある
- ・「サポートブック」(医療センターのプログラムでとして作成) が作成されていることもある

※ 別紙、令和3年度の「サポート情報」形式を参考にしてください。

【コラム】

月刊誌「実践みんなの特別支援教育」(学研)に連載されている「困り感を抱く子供に寄り添う手立て3000」(佐藤 暁：岡山大教授)の記事は、大変参考になると考えます。様々な対応案が載っています。



佐藤 暁 (岡山大学大学院教育学研究科 教授)

困り感を抱く子どもに寄り添う手立て3000